

平成8年度 結核・感染症サーベイランス事業等からのウイルス検査結果

微生物課 ウイルス担当

当所では平成4年度より福岡県結核感染症サーベイランス事業の福岡市内定点の検査を開始し、現在7定点で実施している。

8年度に当所に搬入された検体は検査定点の患者111名・128検体（結核・感染症サーベイランス事業）、および別に依頼しておいた検査定点以外の患者17名・17検体であった。

ウイルスの分離及び検出は細胞培養（主にRD-18S・BGM・Vero・HEp-2・MDCK）、電子顕微鏡観察、ラテックス凝集法等を用いて行った。

その結果、患者128名・145検体から45株のウイルスが分離された。検体数に対するウイルス分離率は31.0%と、ほぼ例年どおりの数値であった。

検体搬入理由（臨床診断名）別の患者数については、昨年度に比べヘルパンギーナや流行性角結膜炎がやや増えたが、その他はほぼ減少傾向であった。また搬入された検体の58.6%はインフルエンザ様疾患であった。

表1に本年度当所に搬入された検体のウイルス検査結果を示した。

ウイルスが分離された検体の内訳は、咽頭うがい液よ

り23株、同様に咽頭ぬぐい液16株・ふん便1株・髄液3株・陰部尿道頸管擦過物2株である。

表2に本年度の月別、細胞別ウイルス分離状況を示した。ウイルス分離は季節的に夏と冬とに比較的集中し、6～8月と11～2月に分かれる。特に冬期におけるインフルエンザウイルスの分離が顕著であった。

検査方法別のウイルス分離状況は、今年度は45株すべてが細胞培養から得られ、その他の方法では分離、検出されなかった。細胞別のウイルス分離ではMDCK（27株）・HEp-2（12株）・BGM（12株）・Vero（11株）・RD-18S（8株）の順に多かった。

インフルエンザはMDCK、コクサッキーA10型はRD-18Sから、アデノ3型はHEp-2からのみ分離されたが、他は特に細胞による差は認めなかった。

本年度の当所における分離ウイルスの主なものをあげると、インフルエンザは27株全てがA・H3型であり、またコクサッキーB2型がヘルパンギーナ、無菌性髄膜炎から、コクサッキーA10型が手足口病とヘルパンギーナから分離されている。

表1 平成8年度当所搬入検体のウイルス検査結果

臨床診断名	患者数	検体数	分離検体名	分離ウイルス名(分離株数)	陰性数
感染性胃腸炎	1	1			1
手足口病	6	7	咽頭ぬぐい液	コクサッキーA10型(1)	6
ヘルパンギーナ	6	6	咽頭ぬぐい液	コクサッキーA10型(2)・コクサッキーB2型(1)・コクサッキーB4型(1)	2
インフルエンザ様疾患	81	85	咽頭うがい液	インフルエンザAH3型(20)・アデノ3型(2)	56
			咽頭ぬぐい液	インフルエンザAH3型(6)	
			気管内吸引物	インフルエンザAH3型(1)	
流行性角結膜炎	6	6			6
無菌性髄膜炎	10	18	ふん便	コクサッキーB2型(1)	13
			髄液	エコー7型(1)・コクサッキーB2型(1)・コクサッキーB4型(1)	
			咽頭ぬぐい液	コクサッキーB2型(1)	
脳・脊髄炎	5	6			6
陰部ヘルペス	5	5	陰部尿道頸管	単純ヘルペス2型(2)	3
			擦過物		
不明発疹症	2	2			2
その他	6	9	咽頭ぬぐい液	コクサッキーB2型(1)・単純ヘルペス1型(3)	5
合計	128	145			100

表2 平成8年度月別、細胞別ウイルス分離状況（サーベイランス事業）

(株)

分離ウイルス	月別ウイルス分離状況													分離 株数 計	検査法別ウイルス分離状況 細胞培養				
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	RD-18S		BGM	Vero	HEp-2	MDCK	
コクサッキーA10型			2	1										3	3				
コクサッキーB2型				2	3									5		5	4	4	
コクサッキーB4型				2										2		2	1	1	
インフルエンザA・H3型									15	10	2			27					27
アデノ3型									2					2					2
エコー7型									1					1	1	1	1	1	
単純ヘルペス1型					2							1		3	3	3	3	3	
単純ヘルペス2型					1	1								2	1	1	2	1	
合 計	-	-	2	5	6	1	-	3	15	10	3	-	45	8	12	11	12	27	

RD-18S・BGM・Vero・HEp-2・MDCK：細胞名